

自称詞にみられるスタイル変異

——親族の事例より——

小 森 由 里

キーワード： 自称詞、スタイル変異、親族、スピーカー・デザイン・アプローチ、
参与観察

1. はじめに

話し手が1人の聞き手に対して人称詞¹を用いる場合、常に同じ形式を用いるとは限らない。いくつかの人称詞が使い分けられたり、ゆれが生じることがある。つまり一種のスタイル・シフトがおこっているのである。²これらは無秩序におこるのではなく、ある決まったパターンに従って変異していると思われる。本稿では対話者を親族に限定し、人称詞の中の、話し手が自分自身を指す自称詞に焦点をおき、スタイル変異がおこる要因を明らかにする。

2. 先行研究

日本語の自称詞になり得る言語形式には、名前、職業名、役割名、人称代名詞などさまざまなバリエーションがある。人称代名詞だけを取り出しても「わたくし」「わたし」「ほく」「おれ」などその形式は多様である。そのため、これまではさまざまな自称詞が使い分けられる要因を解明する研究が行われてきた。小林(1999)は自称詞の使い分けを話し手の性差に主眼をおき、また吉田(1990)は学校生活の様々な場面、桜井(2002)はデザイン事務所、美容院、研究機関といった職場における自称詞をコンテクス

2 小森由里

トという点から分析している。さらに人称詞を待遇表現の一項目と捉え、話し手と聞き手との年齢差、職階差といった社会的関係を取り上げた研究(国立国語研究所 1986・2002・2003、真田 1990、杉戸・尾崎 1997、本田 1998)などがある。

本稿と同様に親族を対象とした自称詞に関しても、鈴木(1973・1999)、小泉(1990)、田窪(1992・1997)は、対話者の待遇性に注目している。親族間で自称詞として用いられる形式は、人称代名詞、名前、親族語であることを指摘し、親族内の目上の者に対しては名前で自称することが可能で、目下の者には自分を相手の立場からみた親族語で自称することができるというのである。つまり話し手と聞き手の年齢差、世代差によって自称詞が使い分けられると論じている。このように先行研究では、話し手の性差、コンテキスト、対話者の関係などの観点から自称詞の運用を捉え、特に親族を対象とする研究では、対話者の親族関係や年齢差など自称詞選択の最も重要な要因として対話者間の待遇性を強調している。

他方、これまでの研究では次の二点が見落とされている。第一は、同じ対話者間では常に同じ形式の自称詞が使われると想定されていることである。先行研究では話し手が1人の相手に対し常に同じ形式の自称詞を用いるということが前提となっているが、実際にはいくつかの形式が使い分けられたり、ゆれが生じたりすることも考えられる。第二は、話し手が自称詞を使い分ける要因として、話し手の属性、聞き手、コンテキストなど外的側面ばかりが強調されている点である。確かに外的影響も大きいであろうが、話し手自身に関わる要因を軽視することはできない。本稿では、以上の二点に留意し、従来とは異なる枠組みによって、大規模な数量研究では捉えることができない個人の言語行動に着目し、個人内の自称詞変異を分析することを試みる。

3. スタイル・シフトの研究史

スタイル変異研究において、その変異に影響を及ぼす要因についてさま

ざまな説が提唱されてきた。本稿における自称詞分析の枠組みを明確にするため、スタイル・シフトの研究史を概観する。

3.1. 注意変数

Labov (1972) が行った数量的分析では、話し手の「発話に払われる注意の量 (attention paid to speech)」を、スタイル変異のパターンを説明する根拠と捉えている。話し手が自分の言っていることに気をつけていればいるほど、そのスタイルは形式ばるというのである。このパラダイムの中で多くの数量的研究が行われてきたが、その一方で Dressler & Wodak (1982), Bell (1984), Milroy (1987) らによっていくつかの問題点も指摘されている。

3.2. オーディエンス・デザイン

Labov のモデルの問題点を指摘し、その代案として Bell (1984) は社会心理学のスピーチ・アコモデーション理論 (Giles & Powesland 1975, Thakerar et al. 1982) に基づき、オーディエンス・デザイン (Audience Design) という考え方を提唱している。オーディエンス・デザインでは、話し手に影響を及ぼすのは、さまざまな会話の参加者であるとみなし、addresser (聞き手)、auditor (傍聴人)、overhearer (偶然聞く人)、eavesdropper (盗み聞く人) という 4 種類の相手をあげている。Bell は、話し手の言語スタイルには当然話し手本人の影響が大きい、その次に大きいのは聞き手であり、さらに傍聴人、偶然聞く人といった順番になるという仮説をたてている。

3.3. スピーカー・デザイン

Labov, Bell それぞれのモデルでは、話し手を外的状況に応じてスタイルを変える受け身なもののみなしている。これは言語を社会階層や相互規範の現れとし、話し手を既存の規範に従属するものと捉えているためであ

4 小森由里

る。一方、話し手とは自ら規範を構築したり維持したり、積極的な働きをするものと主張する社会構成論が認められ、話し手に焦点をおいたスピーカー・デザイン・アプローチ (Speaker Design Approaches) がスタイル変異の分野で注目されつつある。

Schilling-Estes (2002) によると、スピーカー・デザイン・アプローチは話し手をスタイル変異に関わる重要な要因として捉え、ある発話スタイルの選択がどのような状況と関連しているかということより、話し手自身がどのような理由でそのスタイルを選択しているかに着目している。つまり話し手の主体性を認め、話し手がスタイルを選択することで、自らの社会的意味、社会的アイデンティティーを表現していると解釈し、その観点からスタイル変異を説明しようとするのである。

スピーカー・デザインでは、Labov の「発話に払われる注意の量」や Bell の「オーディエンス」といった単一の要因だけではなく、種々の要因を幅広く取り上げる必要がある。本稿では、スピーカー・デザインの理論に基づき、話題、場面のような外的要因に加え、発話の目的、話し手のムードなど話し手の内面に関わる内的要因を含む多元的観点から親族間の自称詞の変異を分析する。

4. 調査方法

4.1. データ収集

本研究では、参与観察によって人称詞のデータを収集する。参与観察とは、調査者がフィールドに入り、インフォーマントと密着しながら調査を進める方法、つまり「参加しつつ観察する」方法である。³ 本調査では、2002年8月と12月、2003年1月に筆者がフィールドワーカーとなってインフォーマントの親族内に入り込み、その日常生活に密着することによって、個々のインフォーマントがさまざまな状況の下でどのような自称詞を用いているか、自然談話の中で運用される自称詞をデータとして収集した。⁴ データを確実に保存するため、ミニディスク・レコーダーによって

41 の場面で親族の談話を 41 時間 3 分 52 秒間録音し、それを文字化して録音資料とした。⁵

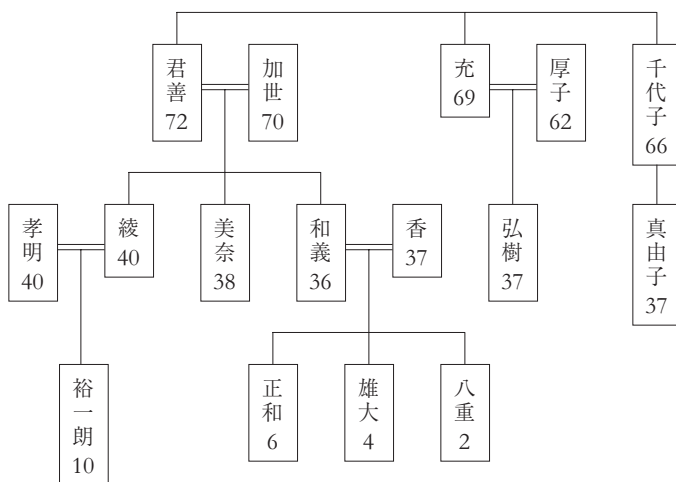
4.2. インフォーマント

参与観察のインフォーマントは、調査時に和歌山県紀南地方に居住する 31 人の筆者の親族である。⁶ 31 人のインフォーマントのうち 6 人(大人 3 人、子ども 3 人)の自称詞のスタイル・シフトが顕著であった。6 人の詳細は表 1、6 人及びその聞き手の親族関係は図 1 の通りである。なおプライ

表 1 インフォーマント一覧 (2002 年調査当時)

名前	年齢	性別	職業
充 (みつる)	69 歳	男性	会社役員
厚子 (あつこ)	62 歳	女性	主婦
孝明 (たかあき)	40 歳	男性	会社員
裕一朗 (ゆういちろう)	10 歳	男性	小学 5 年生
正和 (まさかず)	6 歳	男性	小学 1 年生
雄大 (ゆうだい)	4 歳	男性	幼稚園生

図 1 親族図⁷



6 小森由里

バシー保護のためインフォーマントの名前、発話中の人名はすべて仮名とする。

5. 調査結果

子どものインフォーマントは言語習得過程にあり、大人とは異なる自称詞のスタイル変異がみられるため、大人と子どもで二分し、それぞれの変異について発話内容やコンテキストを考慮しながら分析する。

5.1. 大人の自称詞

5.1.1. 充(69歳)

充は、「わたし」「ぼく」「おれ」「おいさん」⁸「わし」「おいら」という6種類の自称詞を用いている。表2から明らかのように、充は3人の姪を聞き手とする場合に、さまざまな自称詞を使い分けている。2人の姪の綾と美奈を聞き手として「おいさん」が用いられている。先行研究でも指摘されているように、聞き手との親族関係を意識し、聞き手の視点をとった自称詞である。「おいさん」は、充が綾と美奈のおじであることを冷静に意識し、おじという立場から発話する際に使われている。

聞き手を意識した「おいさん」とは異なり、聞き手以外の要因によって選択される自称詞が「わし」「ぼく」「おれ」「わたし」である。まず「わ

表2 充の自称詞

聞き手	充との親族関係	自称詞のバリエーション
綾	姪	おいさん③ ぼく⑫ わし④ おれ⑨
美奈	姪	おいさん② おれ③
真由子	姪	わたし① ぼく② おいら① おれ⑦
加世	義理の姉	ぼく①
君善・厚子・綾	兄・妻・姪	わし① ぼく①
君善・綾・弘樹	兄・姪・息子	ぼく③

(自称詞横の数字は、参与観察中の各自称詞の運用回数を表す)

し」は、(1)のように充と親しい身内や友人が話題にのぼる場合に用いられている(5例)。

(1) 充 → 姪(綾) [場面 7]⁹

そいでわしと堀内の姉さんとね そいでばあさんと裏でよう一緒に寝起きしてね

(1)では充の祖母と姉が話題となっている。他にも兄や親友などに懐古的に言及する場合には聞き手がだれであっても「わし」が自称詞として使われている。

次に、充が権威のある立場から他者に対して意見を述べたり、批判する発話では「ぼく」が用いられている(15例)。父親の視点から息子の言動に言及し、自分を見習うよう述べている発話(2)の中では、(1)と同じ場面面で同じ姪が聞き手であっても「ぼく」と自称している。

(2) 充 → 姪(綾) [場面 7]

もうぼくはのう そいで言うんやだ あの うちでおやじ見習え

「おれ」は、「おれ+思う」という形式が他の自称詞より多く認められ、充が真情を吐露したり、意見を表明する場合に用いられる。「おれ」が使われるコンテキストからもそれが明らかである。「おれ」が最も頻繁に使われるのは場面7で、全く使われないのは場面20である。場面7では、幼い頃からよく知っている姪三人を相手に、充自身がイニシアティブをとって話を進めている。その内容も、息子やその家族、自分の子ども時代など、充の気持ちが直接表現されるようなものが多い。一方場面20では、同じテーブルに孫や息子の妻と一緒に座っており、場面7のように充が中心となった会話ではなく、さまざまなインフォーマントが次々に話題を提供しながら話が展開していくため、充が真情を吐露するような機会はほとんどない。その結果、場面7では「おれ」が15回用いられ、場面20では一度も使われていない。

(3)と(4)は、場面23で充が姪の綾に息子の就職活動について興奮気味

8 小森由里

に自分の真情を述べる発話である。

充 → 姪(綾) [場面 23]

(3) おれ初めて聞いたんやで

(4) うんうん そやんでの おれはあれはなにが目的かわからんや

同じ姪を聞き手として息子に言及する場合でも、父親として客観的に意見を述べる際には(2)のように「ぼく」が、感情的になって真情を吐露する際には(3)(4)のように「おれ」が用いられている。

最後に「わたし」は1例だけであるが、姪にもうすぐ70歳になることを指摘され、それを認めた発話の中で用いられている。

(5) 充 → 姪(真由子) [場面 7]

真由子: 若いわねえ とても70になる人には見えん もうすぐ
2週間後に70歳

充: ああ70ねえ わたしも

真由子: うそみたいですねえ

充は嫌々ながら70歳になるということ認めており、それをおどけた調子で笑いを誘うように表現するために、めったに使うことのない「わたし」というスタイルを用いたのではないかと考えられる。真由子が通常は使わない「…ですねえ(下線部)」というスタイルで返答していることも、充が「わたし」と自称した効果によるものと考えられる。

5.1.2. 厚子(62歳)

充と同様に、聞き手との親族関係を意識した場合と感情表現をする場合で厚子も自称詞を使い分けている。厚子が調査対象となるのは、厚子宅で義理の姪の綾と話をする場面20である。そこで厚子は義理の姪を聞き手として「わたし(11例)」「おばさん(2例)」の2種類の自称詞を用いている。

「おばさん」は、場面の冒頭で厚子が綾に自分が読んだ本を薦める発話内で用いられている。この2例は姪だけに本を紹介するという内容で、義理の姪を聞き手として意識しているため姪の視点をとって「おばさん」と自

称している。

一方「わたし」は、感情(「おもしろい」「つらい」「困った」)、希望(「～したい」)、判断表現と共に用いられることが多い。同じ場面で同じ姪を聞き手としていても、自分の感想や意見を述べる場合には、聞き手との親族関係とは無関係に「わたし」を用いている。

5.1.3. 孝明(40歳)

孝明は、「わたし」「ぼく」「おれ」「おとうさん」の4種類の自称詞を用いており、基本的には聞き手に応じて自称詞を使い分けている。表3のように、義理の両親には最も丁寧でフォーマルな「わたし」、義理の弟には「ぼく」、妻には「おれ」、息子にはその親族関係から「おとうさん」という形式で自称している。

しかし孝明も充や厚子と同様に、聞き手に関わらず、意思表示をする発話では、聞き手に対して用いる通常の形式とは異なる自称詞を用いている。孝明は義理の父に対して基本的には「わたし」を自称詞としているが、(6)のように2度だけ「ぼく」を用いている。

(6) 孝明 → 義理の父(君善) [場面 35]

うん あれ ぼくは あのう あれはすごいことだなあと思うのは

これはノーベル賞をとった田中さんを話題にし、孝明が「すごい」と評するところである。気分が高揚した状態で自分の意見を述べているために、

表3 孝明の自称詞

聞き手	孝明との親族関係	自称詞のバリエーション
君善	義理の父	わたし⑥ ぼく②
加世	義理の母	わたし①
綾	妻	おれ⑩ ぼく①
和義	義理の弟	ぼく⑮ わたし④ おれ⑤
美奈	義理の妹	おれ①
裕一郎	子	おとうさん③

「ほく」が使われたと考えられる。

また充の「わし」のように、話題が自称詞のゆれの要因になる例もみられる。通常孝明が義理の妹の美奈に対して用いる自称詞は「ほく」であるが、(7)では「おれ」を自称詞として用いている。

(7) 孝明 → 義理の妹(美奈) [場面 38]

うん そう あの持つてる料理の本って だいたいおれが買って
やったやつだもん

(7)は、孝明が妻に料理の本を買ったことに言及し、直接の聞き手より話題にのぼる妻を意識したため、妻に対して通常用いる「おれ」を義理の妹に用いたと解釈できる。

一方孝明には、充や厚子とは異なる要因に基づく自称詞のゆれがみられる。義理の弟に対する「おれ(5例)」、「わたし(4例)」がそれである。(8)は、孝明が購入した車を話題にした会話である。

(8) 孝明 → 義理の弟(和義) [場面 36]

孝明： で ほら 都内走るからさあ もうそんなもんで十分かなと

和義： うん 大きいと大変ですもんね

孝明： で 運転するのこっちだもん(妻の綾を見ながら)

和義： うん

孝明： まあ おれ運転しないもん

和義： ああ 運転されてあっちこっち

孝明： え？

和義： ほこほこされたらたまらないですよ

孝明： うんあんまり ほこほこ ちょっとほこほこしてるよなあんだ な

綾： なんて

(8)で孝明は義理の弟と話をしているが、傍らに居る妻も意識している。そのため、自称詞も義理の弟に対する基本形の「ほく」ではなく、妻に対して通常用いる自称詞「おれ」が使われたと考えられる。つまり Bell

(1984) の提唱したアプローチのさまざまなオーディエンスの中の「傍聴人」の影響による自称詞のゆれである。

同様に、(9) も傍聴人の影響による自称詞のゆれである。

(9) 孝明 → 義理の弟(和義) [場面 35]

今あのおう ミネラル あのおう サプリメントとってるんですよ
わたし

(9) の直接的な聞き手は義理の弟であるが、孝明の隣に座っている義理の父を傍聴人として意識したため、義理の弟に用いる「ぼく」ではなく、義理の父に対して通常用いる自称詞の基本形「わたし」を用いていると捉えることができる。

5.2. 子どもの自称詞

5.2.1. 雄大(4歳)

雄大は、表4のように、大人の聞き手に対してほとんどの場合「ぼく」と自称し、兄の正和と従兄の裕一朗が聞き手の場合には「ぼく」と「おれ」の二種類の自称詞を用いている。兄と従兄を聞き手とした「ぼく」と「おれ」の使い分けを明らかにするため、雄大の「おれ」の運用に着目すると、次の二つの用法が認められる。

まず「おれ」は、雄大が従兄の裕一朗と兄の正和の3人でトランプをする場面35で集中的に使われている(24例)。しかし遊びの中の「おれ」は、雄大が自主的に用いるのではなく、トランプを始めて兄の正和が「おれ」

表4 雄大の自称詞

聞き手	自称詞
君善(祖父 ③) 加世(祖母 ④) 和義(父 ⑥) 香(母 ⑱) 綾(おば ⑮) 美奈(おば ③) 孝明(義理のおじ ⑥) 正和(兄 ⑤) 八重(妹 ②) 裕一朗(従兄 ⑫)	ぼく
綾(おば ①) 正和(兄 ⑨) 裕一朗(従兄 ⑦) 正和・裕一朗 ⑨ 不特定 ③	おれ

(聞き手横の括弧内は、雄大と聞き手との親族関係と自称詞の運用回数を表す)

12 小森由里

と自称したのを契機に、徐々に従兄の裕一朗も「おれ」を使い始め、それに連動して雄大も「おれ」を用いている。これは、話し手が聞き手に受け入れられるために自分の話し方のスタイルを相手のスタイルに近づけようとするアコモデーションと考えられる。兄や従兄と同じ自称詞の形式に合わせて雄大も「おれ」を用いることで、共にトランプ遊びをし、場を共有していることを相手に認めてもらおうと意図しているのである。

次に、雄大は兄の正和に対して強い主張や自己弁護をする場合にも「おれ」を用いている(4例)。(10)(11)はトランプの場面で正和に非難された際の雄大の返答である。

(10) 正和: ほら 雄大 なんで そっちからとってんねん おまえ
雄大: よいしょ よいわおれ 1番へりもんななあ [場面 35]

(11) 正和: なんでそっちばかりひくねん [場面 35]
雄大: だっておれ心配になっちゃうんだよ そっちジョーカー

雄大は正和の2歳年下の弟であるが、正和と同等でありたいという意識が強く、ある種のライバル心を抱いている。そのため、大人を聞き手とする場合の「ぼく」とは異なる自称詞を正和には用い、同じ立場を主張していると解釈できる。

5.2.2. 正和(6歳)

正和は「ぼくたん」「あたし」「ぼく」「おれ」の4種類の自称詞を用いている。4種類の中で「ぼくたん」と「あたし」は運用数が限られているが、共に正和がとても機嫌がよく、気分が高揚している場面での発話である。

(12) 正和 → 聞き手 不特定 [場面 1]
ぼくたんも食べるんだな さてぼくたん食べよう

(13) 正和 → 従兄・弟(裕一朗・雄大) [場面 35]
やったー やったー やったきた やったきたわよ あたしのぶりぶりせいじんよ

(12)は、海で魚が釣れて機嫌よく帰宅し、食事を始める場面での発話であ

表 5 正和の自称詞

聞き手	自称詞
不特定 ③	ぼくたん
裕一郎・雄大(従兄・弟 ①)	あたし
加世(祖母 ⑤) 香(母 ⑥) 綾(おば ②) 裕一郎(従兄 ⑱) 雄大(弟 ⑪) 八重(妹 ①) 裕一郎・雄大 ⑪ 不特定 ⑰	おれ
君善(祖父 ①) 加世(祖母 ①) 和義(父 ③) 香(母 ⑳) 綾(おば ⑤) 美奈(おば ③) 裕一郎(従兄 ⑤) 八重(妹 ①) 孝明(義理のおじ ⑧)	ぼく

る。特定の聞き手に対するものではなく、歌いながら独り言のように「ぼくたん」と自称している。また(13)は、従兄、弟とトランプをする場面で、漫画のキャラクターが用いる「あたし」をふざけて真似たもので、とても楽しくトランプをしている最中、さらに場を盛り上げようとして用いたと捉えることができる。

これらを除く正和の自称詞は、「ぼく」と「おれ」である。「ぼく」は大人を聞き手とする場合に用いられることが多く、常に「おれ」を用いる相手は弟の雄大に限られる。従って「ぼく」と「おれ」は、主に聞き手によって使い分けられていると考えられるが、正和の「おれ」には更なる用法が認められる。

まず正和は、子どもの間で連帯感や仲間意識を表すために「おれ」を用いている。従兄の裕一郎を聞き手として「ぼく」と「おれ」の2種類の自称詞が使われるが、自称詞「おれ」が頻繁に使われるのは、子どもだけでトランプをする場面 35 と 36 である。正和は、これらの場面を子どもだけのコンテキストと認識し、「おれ」が集中して用いられる(44例)。同じようにトランプをする場面でも、祖母の加世が聞き手となる場面 22 では、「おれ」が使われることはなく「ぼく」が自称詞となっている。つまり、正和は「おれ」を子どもの間で用いる自称詞と意識し、その連帯感を示すために用いている。

次に正和は、通常は「ぼく」と自称する祖母や母に対して「おれ」を用

14 小森由里

いることもあるが、それは(14)のように大人に対して強く主張する場合である(9例)。

(14) 正和 → 母(香) [場面 22]

ええ 何でおれやねん・おれやってないじゃん・なんでおればかり

(14)は、正和を叱る母親に抗議する発話である。このように大人に対して反論したり、自分の意見や立場を強く主張する場合にも「おれ」が自称詞となっている。

5.2.3. 裕一郎(10歳)

裕一郎は「ほくちん」「ほく」「おれ」という3種類の自称詞を用いている。「ほくちん」は、正和が「ほくたん」を用いた場面1と子どもだけでトランプ遊びをする場面35の二箇所 で用いられている。上述の正和の「ほくたん」「あたし」と同様に、「ほくちん」も、裕一郎が高揚した気分 のときに用いる非日常的な自称詞であると考えられる。

表6から明らかなように、裕一郎が日常頻繁に用いる自称詞「ほく」と「おれ」は、聞き手に応じて明確に使い分けられている。大人に対しては常に「ほく」を用い、「おれ」を自称詞とするのは二人の子ども、従弟の正和と雄大を聞き手とする場合に限られる。

従弟を聞き手としても「おれ」ではなく「ほく」が用いられることがあるが、これには、大人の存在が影響を及ぼしている。場面18と場面35で裕一郎が従弟と共にトランプ遊びをする2つのコンテキストを比較するとそれが明らかである。場面35では、子ども3人だけであるため「おれ」が

表6 裕一郎の自称詞

聞き手	自称詞
綾(母・①) 正和(従弟・①)	ほくちん
正和(従弟・④) 雄大(従弟・⑤) 正和・雄大(⑩) 不特定②	おれ
加世(祖母①) 孝明(父②) 綾(母②①) 美奈(おば①) 真由子(母の従妹①) 正和(従弟③) 雄大(従弟②)	ほく

頻繁に用いられている(15例)。一方、場面18では、同じトランプ遊びのコンテキストであるが、裕一郎は一度も「おれ」を用いていない。ここでは、子ども3人に加え、裕一郎の母、叔母、義理の叔母という大人が同席している。そのため直接大人を聞き手とするわけではないが、傍聴人としての大人を意識し、「ぼく」を用いたと考えられる。つまり、裕一郎は「ぼく」と「おれ」とのフォーマリティーの違いを理解し、大人が居る場で「おれ」を用いるのは不適切と捉えているのである。

6. 考察

先行研究(鈴木1973、1999、小泉1990、田窪1997)は、親族間で通常用いられる基本的な自称詞の形式は、話し手と聞き手との世代差、年齢差に基づいて定まっており、聞き手に応じて自称詞が使い分けられると捉えていた。しかし本調査の結果、様々な要因によってその形式にゆれが生じたり、数種類の形式が使い分けられることが明らかになった。

大人3人と子ども3人のインフォーマントを中心にその言語行動に着目した結果、自称詞のスタイル・シフトの要因として、話題、傍聴人、話し手のムードの3点をあげることができる。充の「わし」や孝明の「おれ」のように、話題の性質や話題の人物の影響によって自称詞にゆれが生じることがある。同様に、傍聴人の存在も大人と子どものどちらの自称詞にもゆれの要因となっている。大人の場合には、孝明が義理の弟を聞き手として用いる「わたし」「おれ」のように、傍聴人を意識するあまり通常であれば傍聴人に使う形式を聞き手に用いてしまうという例がみられるが、子どもの場合には裕一郎の「おれ」のように、監視役のような大人の傍聴人のために、本来ならば使うはずの自称詞の運用をやめる例がある。それぞれ傍聴人の果たす役割は異なるが、どちらの場合にも話し手が傍聴人を意識した結果、自称詞にゆれが生じるのである。

さらに、話し手が平常心ではなく心情を吐露したり感情的になっている場合にも自称詞のシフトが認められた。充の「おれ」「ぼく」「わたし」、厚

子の「わたし」、孝明の義理の父に対する「ぼく」がそれである。大人と同様に子どものインフォーマントでも、気分が高揚したり興奮気味のときや感情的に自己主張するような場合、自称詞の形式にゆれがみられる。形式の上でも、話し手のムードを表す「おれ」には大人と子どもに共通点がみられる。真情を吐露する際に大人では充が「おれ」を用いる例があるが、子どもの場合も、自分の意思を表明するときには正和のように「おれ」を用いることがある。先行研究(杉戸・尾崎 1997、小林 1999、桜井 2002)では、場のフォーマリティーや話者の性別の点から「おれ」の運用を分析しているが、「おれ」には男性が自己表明をする場合の自称詞としての機能も考えられる。

一方、子どもの自称詞には大人にはみられないアコモデーションによる自称詞の使い分けがみられる。子どもの親族どうしは親族としての交流の期間が短く大人同士ほど人間関係が整っていないことから、相手との関係を構築していくために相手と同じ自称詞の形式を用い、相手に合わせていく様子が見られる。さらに、子どもだけのコンテクストを作り出し、互いの連帯感を示したり仲間意識を表したりするために、同じ自称詞を用いるという用法も認められる。

また子どもには、年齢に応じた自称詞の使い分けがみられる。4歳、6歳、10歳の3人の子どものインフォーマントは、「ぼく」と「おれ」を自称詞として用いているが、4歳のインフォーマントが2つの形式を使い分けることができず、6歳と10歳のインフォーマントに連動して「おれ」を用いるのに対し、6歳と10歳の2人は、基本的に「ぼく」は大人を聞き手として、「おれ」は子どもを聞き手として用いる自称詞と捉え、それぞれの形式のもつ待遇性を認識している。さらに10歳になると、聞き手だけではなく場を共有する傍聴人をも意識することができる。直接の聞き手ではなくても、大人が居る場での「おれ」の運用は不適切と認識し、大人の存在を意識すると「おれ」を用いることはない。

このように自称詞のスタイル変異には、子ども独自の用法、子どもにも

大人にも共通する用法がみられる。子どもは人称詞の習得過程にあるために生じるゆれや、親族としての人間関係を築こうとする上でみられる自称詞の用法など、インフォーマントが子どもであるが故におこる自称詞の変異が観察された。一方、大人であっても子どもであっても、自己主張や感情の表出など話し手のムードや傍聴人の存在などは自称詞のゆれや使い分けの主要な要因となっている。

7. おわりに

これまで日本語の自称詞は、話し手の属性、対話者の人間関係、コンテクストなどの点から研究されてきた。親族間の自称詞も対話者の親族関係や年齢差などインフォーマントの属性に関わる要因が強調され、これらが一定の場合には自称詞に変異はみられないものと想定されていた。しかしながら本研究では、参与観察という調査方法によってインフォーマントに密着して日常生活の様々な場面で親族間の談話を録音し、さらにスピーカー・デザイン・アプローチに基づき個々の話者の言語行動に注目して分析した結果、一人の話者が同じ聞き手に対していくつかの自称詞を使い分けたり、自称詞にゆれが生じる実態を捉えることができた。一親族という限られた調査対象のため、調査結果から自称詞のスタイル変異を解明したとは言いがたいが、本研究によってこれまで取り上げられることがなかった自称詞のゆれ、使い分け、及びその要因の一端を明らかにすることができたと言えよう。

追記 本稿は第19回社会言語科学会でポスター発表したものを改訂したものである。

注

1 仁田(1981: 102)によると、人称とは話し手が表現する名詞・代名詞が話し手自身を指示するもの、聞き手を指示するもの、それ以外の人・物・事などを指示するものと区別する現象であり、その表現手段が人称詞である。人称詞は、その人称

性によって自称詞・対称詞・他称詞の三種類に分類することができる。

2 初期の変異研究は音韻や形態統語の面に限られていたが、Schilling-Estes (2002: 376) は、語彙、語用、談話などさまざまな言語構造がその研究の対象となり得ると主張している。

3 元来、参与観察は人類学や社会学の分野で用いられていたが、言語学においても Milroy (1980), Li (1994), Eckert (2000) などによってデータ収集法として使われている。

4 参与観察には、大量で質の高い日常言語のデータが得られるという長所がある反面、Labov (1972: 209) によって「観察者の逆説」(“observer’s paradox”) という問題点が指摘されている。調査者はインフォーマントの普段のままの発話を録音したいと考えているが、調査者がフィールドに入ると、インフォーマントは調査者や録音機具を意識してしまい、日常の自然な談話を収集することが難しくなる可能性がある。つまり観察者の存在、観察者の記録という行為によって、観察の対象をゆがめることになりかねないことを Labov は問題視しているのである。しかし本調査では、調査者である筆者はインフォーマントの親族であり、すでに強力な人間関係を築いているため「観察者の逆説」とは無関係に、伝統的な参与観察法に最も近い形の調査が可能である。

5 倫理面の問題を考慮し、録音資料に関わるインフォーマント全員に同意書をとって、談話の録音データを研究目的に使用する承諾を得ている。

6 親族の中には血縁関係の者ばかりではなく、姻族など非血縁者もいる。本稿中の「義理」の親族は、非血縁者を指す。また和歌山県で調査を行ったため、調査時に和歌山に居た親族がインフォーマントとなったが、そのすべてが調査地に常時居住しているわけではない。従ってインフォーマントの使用言語は和歌山県の紀南方言、大阪方言、東京方言などさまざまである。

7 親族図内の数字は、2002年調査当時のインフォーマントの年齢を示す。

8 和歌山県紀南地方の方言で「おじさん」を表す。

9 参与観察を行った41の各場面に時系列に番号をつけたものである。本稿に関連する場面は、付録に詳細を記す。

参考文献

- Bell, Allan 1984 Language style as audience design. *Language in society* 13, 2: 145–204.
- Dressler, Wolfgang U. and Wodak, Ruth 1982 Sociophonological methods in the study of sociolinguistic variation in Viennese German. *Language in society* 11, 1: 339–70.
- Eckert, Penelope 2000 *Linguistic variation as social practice*. Oxford: Blackwell.
- Giles, Howard and Peter F. Powesland 1975 *Speech style and social evaluation*. London: Academic Press.
- 本田明子 1998 「職場・会社のなかの呼称—自然談話データにみる事例一」『日本語

- 学』17-9: 77-82.
- 小林美恵子 1999 「自称・対称は中性化するか?」現代日本語研究会(編)『女性のことば・職場編』: 113-37. ひつじ書房
- 小泉保 1990 『言外の言語学』三省堂
- 国立国語研究所 1986 『国立国語研究所報告 86 社会変化と敬語行動の標準』秀英出版
- 国立国語研究所 2002 『国立国語研究所報告 118 学校の中の敬語 1—アンケート調査編』三省堂
- 国立国語研究所 2003 『国立国語研究所報告 120 学校の中の敬語 2—面接調査編』三省堂
- Labov, William 1972 *Sociolinguistic patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Li, Wei 1994 *Three generations, two languages, one family*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Milroy, Lesley 1980 *Language and social networks*. Oxford: Blackwell.
- 1987 *Observing and analysing natural language: A critical account of sociolinguistic method*. Oxford: Blackwell.
- 仁田義雄 1981 「人称」北原保雄 他(編)『日本文法事典』: 102-6. 有精堂
- 桜井隆 2002 「「おれ」と「ぼく」」現代日本語研究会(編)『男性のことば・職場編』: 121-48. ひつじ書房
- 真田信治 1990 『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院
- Schilling-Estes, Natalie 2002 Investigating stylistic variation. In: J. K. Chambers, Peter Trudgill and Natalie Schilling-Estes (eds.) *The handbook of language variation and change*, 375-401. Malden: Blackwell.
- 杉戸清樹・尾崎善光 1997 「待遇表現のひろがりとその意識—中高生の自称表現を中心に—」『月刊言語』26-6: 32-39.
- 鈴木孝夫 1973 『ことばと文化』岩波書店
- 鈴木孝夫 1999 『(1) 鈴木孝夫著作集ことばと文化私の言語学』岩波書店
- 田窪行則 1992 「言語行動と視点—一人称詞を中心に—」『日本語学』11-9: 20-27.
- 田窪行則 1997 『視点と言語表現』くろしお出版
- Thakerar, Jitendra N., Howard Giles and Cheshire, Jenny 1982 Psychological and linguistic parameters of speech accommodation theory. In: C. Fraser and K. R. Scherer (eds.) *Advances in the social psychology of language*, 205-55. Cambridge: Cambridge University Press.
- 吉田裕久 1990 「学校における先生・子供の呼称」『日本語学』9-9: 25-31.

付録

参与観察 場面詳細

場面番号	日	場所	録音時間
1	2002年8月12日	君善宅 ダイニング 夕食	143分4秒
7	2002年8月27日	君善の会社 事務所	99分14秒
18	2003年1月1日	君善宅 和室	36分16秒
20	2003年1月1日	充・厚子宅 ダイニング	45分45秒
22	2003年1月2日	君善宅 ダイニング 朝食	110分33秒
23	2003年1月2日	君善宅 ダイニング	39分29秒
35	2003年1月3日	君善宅 ダイニング 夕食	159分7秒
36	2003年1月4日	君善宅 ダイニング 朝食	69分12秒
38	2003年1月4日	君善宅 ダイニング 夕食	212分54秒